
UNDER COVER OF DARKNESS — 《闇》

朱鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNDER COVER OF DARKNESS I 《闇》

【Nコード】

N8199I

【作者名】

朱鳥

【あらすじ】

「辛いかい？ 苦しいかい？ では君に力を与えよう。君の苦しみを壊せるだけの力を。」

その代わり

闇の世界に君臨する一人の王。

彼に囚われ、命を弄ばれる少年たち。悩み、迷い、争い、それでも彼らは少しずつ成長していく。

そして行き着く答えは…？

残酷描写があるかもしれません。お気をつけ下さい。

1 - 1 . 『波』

部屋に染み付いているのか、閉めきった室内にかすかな潮の香りがする。視線の先にある透明な窓の向こうからは、懐かしい音が聞こえてきていた。

少年は窓辺に立ち尽くし、ただじっと、静かな波の音に耳を澄ませていた。

その背後で、一人の少女が目覚めます。

「波の、音…？」

たった一言、まるでその波のようにひそやかに。

少年は勢い良く振り向き、しかし少女がまだ視線を宙に漂わせているのに気づくと、またゆっくり、窓の向こうに顔を向けた。

「海のそばだから…」

少年が答えたその声に、少女は驚いたようだった。人がいるとは思わなかったのだらう。声の主の後ろ姿を確認して、彼女は破顔する。

「そっか…」

少年はそれ以上何も語らず、また振り返ることもしなかった。

二人の間を、寄せては返す波の音だけが通り抜け、真っ白な空間で時間の経過を知らせている。

少女は懐かしむように目を閉じた。

「久しぶり、だね」

その言葉が窓の向こうの海に対するものか、自分に対するものか、少年には判らなかった。だが、どちらだったとしても、答えは「うん」の一言しかない。

すると、それが聞こえたらしい少女の、窓に映る顔が嬉しそうに笑った。少年は胸に痛みを覚えたが、表情に出す事なく振り返る。

少年にとって、彼女は大切な人だった。そんな彼女が目の前で力なく横たわっている。少年は自分が今どんな顔をしていたら良いのか、分からなくなっていた。

「…どうして、かな…」

「え…?」

ぼつり、投げ掛けられた問いは、少年には曖昧過ぎて、思わず聞き返す。

「どっして?」

続いた問い。その声に微妙な変化があるのに気づき、少年は無意識に一步、後ろへ下がっていた。しかしそれは途中で終わる。素早く伸ばされた彼女の腕が、少年の手を掴んだからだ。

「…!」

今の彼女の様子からは考えられない程の力で、腕が掴まれている。少年の背筋が凍る。

先程まで穏やかに微笑んでいたはずの少女は、ただじっと、無表情に彼を見上げていた。

まるで人形のように。

「…どう、して…？」

少年は脅えながらも、自身の腕に食い込む手に視線を向ける。

案の定、白くなるほど力が込められた彼女の指。そこには、小さく光るものがあった。細い指に不釣り合いな毒々しい色は、彼女から体力を奪って輝いているように感じられた。

それを見た瞬間、少年は全てを悟る。

「お願い…」

少年は恐怖したまま首を横に振る。

「お願いよ…」

彼女はとめどなく涙を流し懇願する。だが、少年は必死に拒絶を続けた。

「いや、だ…」

「お願い…!!」

「いやだああああ！」

全ての言葉をかき消すように、少年の絶叫が響き渡った。

⋮

1 - 2 . 『学校』

季節は夏。

開け放ったままの窓から生温い風が入ってくる。

意識が浮上するのを感じて、橘乙夜は目^{たちはないつや}を明けた。手探りで携帯電話を掴み、時刻を確認する。

七時四十五分。授業が始まるまであと一時間弱。遅刻常習犯なので、この時間でも今更焦ったりはしない。最も、遅刻しなかったところで真面目授業を受ける事もあまりないが。

うだうだと10分程ふとんに潜り、結局暑さに負けて起きあがった。

癖のない黒髪をかきあげ、掛け布団を跳ね除ける。立ち上がると、細身の体にシャツが張り付いた。背は高い方ではないが低くもない。標準だろうと彼は思っている。

シャワーを浴びて目を覚まさせて、鏡と向き合う。乙夜はあまり鏡を見るのが好きではない。原因は、映り込むそれが女顔だから。そのせいで昔から女と間違われ、散々な目にあっている。

さつさと着替えを済ませるとアパートを出て原付にまたがる。古いが、ぱっと見では原付に見えないデザインのものです、結構気に入っている。

高校に通うのに原付登校が許されている訳ではないが、彼がしっかり校則を守る日が来るとしたらそれは奇跡である。毎回堂々と乗り込んでいた。

じりじりと太陽が照り付ける海沿いの道を走り、高校を目指す。

夏場は朝のうちに登校した方が暑くないかもしれない。露出した腕が焼けていくのを感じながら、今更少し反省した。

学校は海の近くにある。と言っても、私立で広大な敷地を有しているから校門は海に近いが、そこからグラウンドが続いて校舎は最奥。しかも高台にある為、門までは長い坂の並木道が続く。原付でなければ彼は中まで行く気になれない。

どうせならもっと普通の所にすれば良かったのだが、今暮らす家から一番近いのがここだから仕方ない。

それにあと半年もすれば卒業。だらだらと目的なく居られる『学校』という枠に収まっていられるのもあと僅かだ。そう思うと、面倒ではあるが家で寝ているよりかは登校してやるうという気が起きなくもない。

暑さと坂に負けている生徒を悠々と追い越し、原付を止める。

教室に辿り着くと、彼の元に一人の少女が走り寄って来た。肩につくあたりで揃った黒髪が元気に揺れている。

「おはよう乙夜くん、今日はちゃんと来たんだね！」

頭でも撫でてくれそうな口調でそう言う少女の名は、乾翔子いぬいしよんこという。男同士ですら一歩退いてしまつ乙夜に、何の抵抗もなく話し掛けられるのは彼女くらいなものである。

「ああ…うん」

人付き合いに全く関心のない乙夜だが、翔子の強引さには『無視』というスキルも完璧に負けてしまうので、適当に対応する事で毎回何とかやり過ごしている。

「遅刻はだめだよ。しかもは明日には高校最後の一学期が終わる日だよ！ 明日もこの調子で来ようね！」

「はあ……」

幼稚園の先生かというくらいのテンションについて行けず、朝から乙夜の体力は消えてしまいそうになる。ため息をついてちらりと彼女を見たら、その笑顔の異様さに驚いた。目つきがおかしい。いやいつもおかしいが、今日は特に。

にここにこを通り越しにやにやした彼女が擦り寄ってくる。

「あのね来週の日曜、花火大会があるの知ってるよね？」

「さあ」

「昨日言った、私！」

「あーそう」

「乙夜くん一緒に行こう」

「無理」

秒殺して、乙夜は席に着く。彼女は暫く抵抗していたが、友達に呼ばれて渋々去っていった。

横目にそれを確認すると、安堵の息をついて彼は外を見た。窓際の席だから、景色は良く見える。日避けになりきれしていない痩せた木の向こう、やや離れて海が見える。乙夜はここから見える海が好きだ。

クーラーは完備されているが、午前中はたいてい窓を開けて授業をしている。だから入ってくる風にはかすかに潮の香りが混ざる。波の音は遠いが規則正しく、それがどことなく安心感を与えてくれる。

チャイムが鳴り、教師が入ってくる。乙夜がいることに少し驚

いたようだが何も言わず、出席をとると話しを始めた。テストの結果と夏休みの補習についてだ。大学受験希望者がほとんどなのだろうが、まだまだ自覚のある者は少ない。

休みなんだから休みたい、い、などというやる気のない抗議が飛び交う中、乙夜はずっと海を眺めていた。

この学校の屋上には展望台がある。その裏に、人が一人寝転がるくらいの空間が実はあった。

乙夜は音もなくそこに上がり込むと、腰を下ろした。足場が壊れているので普通の人はまず来ない。彼の特殊な身体能力があつてこそだ。だから授業をサボる時はたいていここにいる。暑い暑い暑い、今の時間は展望台の影があつてまだマシだ。

しかし、今日に限って展望台の影から人影が現れたのを見て一瞬驚き、続いて嘆息した。

「お前かよ……」

「誰なら良かったんだ」

乙夜に劣らない不機嫌な声が返ってくる。地面で反射した光が、声の主を明るく照らした。

まず目に飛び込むのはやや長めの金に近い茶髪。その下には印象的な光を放つ目と、完璧な目鼻立ち。無駄のなさそうな細い身体は、夏だというのにあまり日に焼けていない。

同い年だと聞いたことがあったが、日本人離れというか、人間離れしている。きつと整い過ぎた顔立ちと無表情のせいで、人形のように見えるからだろう。

「明日から夏休みだそうだな」

「そりゃあ夏だからな」

思わずそう返してしまっただが、不毛な会話を続けてもお互い嫌な顔を見る時間が延びるだけだと思いついて、乙夜は考えを改める。

そもそも夏休みなどと言うが、目の前の男は学校に行っているのだろうかとちょっとした疑問を抱きながら乙夜は立ち上がる。

不機嫌な声は一層冷徹さを帯びて彼に告げた。

「仕事、だ」

「……だろうな」

乙夜には特殊な力がある。そしてある人物にその力を買われて契約を結んだ。その男の息子が彼だ。

いつもこうして乙夜に仕事を持ってくる、言わばただのパシリなのだが、こき使われる同士であっても友好的な関係にはなれそうにない。お互い無口なのと、こんな美形とお知り合いになりたくないという乙夜の勝手な心理も手伝って、あまり会話らしい会話をしたことがなかった。

いやいやながら乙夜が手を差し出すと、その中に小さな貝殻が落とされた。

「なんで貝殻…？」

「俺に聞くな」

それもそうかと納得して、とりあえず乙夜は貝殻を握る手に力を込めた。途端に指から淡く光が漏れ、彼がもう一度手を開くと、その中貝殻はなかった。

どういう仕組みで作られるのかは分からないが、これで仕事内容は直接頭の中に入って来るのだ。その中身を確認しながら、乙夜は顔を上げる。

「なあ、お前……」

学校とか行ってるのか、と珍しく話しかけようとしたのだが、そこにはもう誰もいなかった。

「……チツ。ほんつと、無愛想な野郎だぜ……」

自分の事は完全に棚に上げて乙夜は呟く。その場に留まる気も失せて、彼は教室に戻ることにした。

結局授業を全て受け、翔子を振り切って家に戻った乙夜は、鍵をさしこもつとして動きを止めた。わずかだが、どこか違和感がある。一応部屋番号を確認するが部屋を間違えたわけではない。

よし、としっかり確認して、再びドアに近づく。

突然ドアが開いた。

「!？」

「おかえりい！」

中から飛び出してきた人影が乙夜に抱きつく。その勢いに少しよろけて、何とか踏みとどまる。相手を見て彼は目眩を覚えた。

そこに立っていたのは、離れて暮らしているはずの姉であった。

「…よく入れたな」

家に入りながら、乙夜は溜め息交じりに言った。合鍵なんてものはないし、戸締まりはしておいたはずだが。部屋を進む彼の後に続きながら、姉 里佳はあっさり答える。

「大事な弟なんですうって大家さんに言ったら、あっさり開けてくれたの」

たまに会うとやたらと話し掛けてくる大家の中年女性を思い出し、彼は納得した。一目で姉弟と分かるほど、二人の顔立ちは似ているのだ。

「あのオバサン…」

今まで避けていたが、ここらで文句の一つでも言っておかねば。乙夜はついに決意した。そんな彼を姉見上げて軽くにらむ。

「乙夜？ 大家さんには礼儀正しくね」

「はいはい」

「ハイは一回！」

昔から何度も繰り返してきたやり取りをして、二人はくす、と笑いあう。しばらく会っていなかったが、変わりないようであった。制服のネクタイを緩めつつベッドに腰掛けると、窓の外を眺めていた彼女がにこ、と笑いかけてきた。相変わらずの美人ぶりに、と弟ながらドキリとする。

「涼しくなってきたら、ちょっと散歩に行かない？」

断る理由もないので乙夜は頷く。夜には帰らなければいけないというので乙夜としても丁度良い。夕食を一緒にとってから散歩がてら駅まで行くことにした。

何か作ろうと台所に立つと、横に里佳が並ぶ。彼女が買ってきた食材を洗いながら会話が進んだ。

「乙夜最近はどう？ ちゃんとご飯食べてる？」

「大丈夫だよ。姉貴こそ、ちょっとは料理出来るようになったのか？」

「う…井物とかなら」

「…ふうん？ 食べ物になってるなら良いけどな」

「うっさいわね！ 今日は何が何でも完食させてあげるから、見て

なさいよ！」

「いや、心配だから手伝うって」

「いらぬいらぬ！ ほら、着替えてきなさい」

昔から彼女は不器用で、乙夜が毎回フォローしていた。それに彼は高校に上がった時から一人暮らしだ。元々の器用さもあり、一通りの事はすぐできるようになった。

里佳も大学生になってからは親元を離れているはずだが、着替えの最中聞いた限りでは、かなり危なっかしい包丁さばきだ。

懐かしいな、とさえ思いながら、乙夜は少し違和感を感じた。姉と最後に会ったのはいつだったのか、よく覚えていない。だが、彼女がまだ高校生だったように思う。

そう思うとかなりの間会っていないはずだ。

「……………」

何が違和感になっているのかそれ以上は分からないまま、リビングに戻る。里佳が手早く焼きうどんを作って皿に盛っているとこるだった。良い匂いがして、胃袋が空腹を訴え出した。

「たくさん食べてね！」

「ああ……」

乙夜は素直に頷き椅子に座ると何も考えずに箸をとった。

それから、約一時間後。二人は夜道を散歩していた。

「ね、美味しかったでしょ？」

「まあ……」

無事においしく完食できたので、乙夜も里佳も上機嫌だ。しかし不意に彼女が立ち止まる。喉が渴いたらしい。コンビニに寄ろうと道を外れると、海沿いの道に出る。

「いい眺め…乙夜、私ここで景色見てるから何か買ってきて」「はいはい」

乙夜がおとなしく店に入ると冷えすぎなくらいの風に迎えられた。眉をしかめながら、適当に飲み物を選びレジに行く。

そこで乙夜は立ち止まった。カウンターの奥に翔子がいたのだ。

「そんなに驚くことないじゃない」

既に彼に気付いていたらしい翔子は憤然と言った後、声をひそめて尋ねてきた。

「乙夜くん…あの人は？」

あの人、とはコンビニの前にいる姉のことであろう。彼女は今、ぼんやりと海を眺めている。

「ああ…姉貴」

なんとなく気恥ずかしい思いを抱えながら答えると、翔子はなぜか嬉しそうに頷いた。

「へえ…お姉さんかあ。ねえねえ、挨拶してきていい？」

「いや、お前レジ…」

「今お客さんいないもん！　あの、すいませーん！」

目の前にいる乙夜は客のはずだが、カウントされていないらしい。彼は仕方なく料金を置きざりにして後を追いかけた。

「待て乾。姉貴、こいつ同じクラスの…」

「初めまして乾翔子っています！ やっぱりお姉さんも綺麗ですね〜！」

「ありがとう、ええと乙夜の彼女さん？」

「なワケないだろ、なんで俺が…」

「あつ、その言い方は傷つくんだけど乙夜くん！」

「どこが傷つくんだか…」

鼻で笑ってやったら、横から里佳に小突かれた。

「も」。女の口になんかと言っちゃダメでしょ？ フラしても慰めてあげないんだから」

「だから違い！」

否定してみるが、ムキになっているのも馬鹿らしくなり、姉にペットボトルを押し付けて歩き出す。里佳が楽しそうに笑った。

「はいはい。じゃあ、こんな弟だけどよろしくね、翔子ちゃん」

「あ、はいっ」

暫く進んで振り返ると、翔子はまだ外にいた。乙夜に向かって手を振っている。こればかりは無視した。里佳が含み笑いをしているのだ。

「可愛い子ね」

「全然。うるさいだけだ」

妙に上機嫌な彼女に淡々と返して、乙夜は時計に目を落とす。
そろそろ、自分の仕事の時間だ。

「このまま駅まで送る」

「ありがとう。ね、もう夏休みでしょ？ また様子見に来ていい？」

「構わないけど……」

「実家にも顔出さないとね乙夜。あなたも母さん達に会いに行きなさいよ」

「俺は……いい」

乙夜は首を振る。勝手に家を飛び出し、契約をして、それからずっと今の暮らした。もう会う気はなかった。力に目覚めた時に、そう決めたのだ。

乙夜のその表情を見てどう思ったのか、里佳は悲しそうな目で見つめるだけ。強制しようとはしない。彼女はいつもそうなのだ。肝心な決断は、強制しない。自分自身で選ばせてくれる。

「悪い。俺の分まで行ってきてくれ」

「……しょうがない弟なんだから」

そう言った所で、駅が見えてきた。里佳の姿が見えなくなるまで見送ると、乙夜は息を一つ吐いて、ゆっくり踵を返した。

「この世は二つの力が支配している。いや、いた、と言うべきだろう」

無数のろうそくが作り出す儼かな雰囲気の中、壇上で男が声を震わせた。

「この世界は今、ただ一人の闇の王によって支配されている…これがその、証拠だ。見るがいい」

芝居がかった言い回しではあるが、男の言葉には「おお…」というため息にも似た声が応えた。

男の指差す先に、一人の人物が映し出されている。といっても、全身に黒い布を纏い、顔まで隠したその人物写真では、それが男なのか女なのか、むしろ人なのかどうかすら窺い知れない。

だが、男は確信を持って高らかに宣言した。

「このお方こそが、闇の王。光を忌み、闇を求める我らの救世主…」

おおお、と歓声上がる。それを煽りながら、男は続けた。

「そして今日ここに…王が来て下さった…！！ 我らを導く為に…！！！！」

大歓声が沸き起こり、拍手も加わる。男が両手を振り上げた。

ゴオッ！

ろうそくの炎が勢いを増して室内を明るく照らす。あまりの強さに悲鳴も漏れるが、更なる興奮を伴ったものだった。それに応えるかのように、炎は松明の如く燃え盛る。

その様子を見て勢いを無くしたのは壇上にいる男だけだった。

「これは…どういう事だ」

周りに聞こえないよう呟く。すると一瞬にして灯りが消えた。

暗闇に閉ざされた小さな空間の中、何が起ころのだろうという、期待に満ちた静寂が広がる。

やがて静かに、ゆっくりと。足音が近づいてくるのがわかつた。

全員がその方向を見て、息を呑む。

闇の中であるはずだが、黒い布を身に纏うその姿は誰からもはつきりと見る事が出来た。

壇上の男がうろたえたように後退りする。それと同時に、室内の灯りが元の荘厳さを取り戻して柔らかく揺らめいた。

「まさか…王……本、物の…？」

信じられないと言うように発せられた言葉。その男の元へ、黒い影が近づく。その隙間から覗いた二つの光は、深い碧色。凍るようなその光に射抜かれて、男は悲鳴を上げて尻餅をついた。

その男になり代わり堂々たる足取りで壇上に立つと、影はゆっくり布に手をかける。すると音をたせながら、布が影から滑り落ちていく。

室内がざわめいた。

「じ、ごども…!？」
「目が…」

布をとって現れたのは、その場にいた人々からすればほんの子供であった。黒髪がさらりと流れ、整った顔に生意気そうな不敵な笑みを貼り付けている。

しかし何より彼らの動揺を誘ったのは、その少年の大きな目が鋭い光を放っている事。

「王は…」

やや低い、力のある声が響いて、再び静寂が戻る。

「お前たちの存在を認めた…」

人々が顔を見合わせ、次いで、畏敬の念を込めて少年を拝む。この少年が『王』と関係の深い者であると、直感したからだ。彼が両腕を広げ、光を放つ目を閉じるのを見て、彼らはふっと、肩の力を抜く。

「み、認めた…とは…?」

壇の隅で、ただ一人震える男が問いかけた。少年は静かに笑い、再び目を開ける。

告げる声は、どこか楽しげだった。

「言葉通り。闇の王は、お前がしようとしていた事を知って、俺をここへ寄越した…」

「…ひっ!」

少年の言葉の意味を悟り、途端に逃げ出そうとする男を、何も知らぬ人々が怪訝な表情で見ている。

しかし次の瞬間、その顔が恐怖で凍りついた。

ゴオオオオツ！

「うわああああ！」

震えていた男が、突如炎を噴き上げて燃え尽きてしまったからだ。異常な事態であるとようやく悟った数人が出口に向かうも、すぐに何も見えない事に気づいて立ち往生する。

おかしい。ろうそくの火はついているのに、出入口も、壁も、周りの人の顔も、何も認識できない。

「あ…ああつ…」

「闇が欲しいんだろう？ どうだ、闇の中にいる気分は？」

必死にもがく中、少年の声だけがする。彼の声、彼の姿だけは視認できる。しかもう、人々は自分自身の体の感覚すら失っていた。

「た、助け…！！」

「全てを任せろ。その闇の中で……王が待っている」

「こ…怖いっ…いやっ…」

一人がもがき苦しみながら、少年の足にすがりつく。彼は冷たい一瞥を向けた。

「それが嫌なら…」

パチン、と彼の指が鳴らされる。同時に火柱がいくつもあがり、少年にすがっていた手も数秒で灰になる。

彼は次々上がる炎を見ながら、薄く笑っていた。

「みんな消えればいい…」

その言葉は誰に聞かれる事もなく。

彼が軽く頭を振って髪をかきあげた時には、集会らしきものをしてきた集団は跡形もなくなっていた。

「終了つと…」

仕事を片付け、乙夜はふう、と息をつく。

契約を交わして以来、彼はこうして多くの人間を密かに葬ってきた。こんな宗教じみた集団を相手にするのも初めてではない。

「闇に魅入られ…死ではない死を手に入れた者…」

しばしば『闇の王』と呼ばれるその男は、その世界では有名な。闇から世界を操る彼は、時として神と崇められる。

そして、集まった人々の命を取り込んで新たな闇の力を得るのだ。

乙夜の有するこの力も、契約の瞬間から彼の支配する闇に捕われている。その繋がりだけが今、乙夜の命をなげえさせていると言えるだろう。

でなければきつと。乙夜はとっくに死を選んでいたはずだ。

『死にたいというならその命…私に少し預けてくれないかい？』

彼があの時、そう言って目の前に現れなければ。

「…帰るか…」

ぼーっと立ちっぱなしになっていたのに気がついて、乙夜は出口に向かう。

半地下に作られた小さな空間から出て、狭い階段を上ると、一気に繁華街の喧騒に包まれた。

深夜、場違いに若い少年の姿を気に止める者はいない。乙夜は酔っ払い集団をすり抜けると、欠伸を噛み殺しながら繁華街を後にした。

「強い願いは届き、叶えられる」

部屋に入った途端に聞こえたそれに、新手の宗教でも始めるのかと思っただが、禅は黙って聞き流す事にした。

「だが、すべての願いが叶うなら、この世界は幸せで満ち溢れているはずだな。世界は何と不平等でずるいのだろうね…」

くつくつと気味の悪い笑いを漏らすのが聞こえ、心の中でそっ

と反論する。

人の幸せを壊すのがあんたの趣味だからだろ。

口に出して言える日は、まだ当分来なそうである。

代わりに彼は、持ってこいと命じられた重要そうな書類を、男の前のデスクに放ってさっさと出ていくことにした。

この男の闇は、好ましいものでは決してない。血の契約故に、無理やりに呼び寄せられる。この男が闇の王である限り、そこに堕ちた者は彼から逃げることもないのだ。

この男が興味をなくし、捨ててしまうまで。

「おや、禅」

「……」

めざとく気づいた男に呼び止められ、舌打ちして禅は立ち止まった。

「頼んだ書類はもう少しあったはずなんだが…？」

「知るか」

「そうか、困ったねえ」

その声からは全く困っているように感じられなかったが、男は書類を手にうつん、と唸っている。

裏でなんと称されようと、一応これでも大企業の社長なのだ。遊び感覚でも一応は気にかけているらしい。

だが、そんな事は知ったことかと禅は早々に部屋を脱出した。こんな表向きの仕事には興味がない。

何より恐ろしいのは、全ての闇を支配する無限大の力。

禅は無意識に握りしめていた拳をほどき、重いため息を吐いた。

1 - 4 . 『仕事』 (後書き)

ずいぶん間があきましたが、頑張ります。

1 - 5 . 『変化』

翌朝学校につくと、終業式は既に始まっていた。頃合いを見て教室に戻ると、事務的に成績表を渡され、あっさり解散となった。周りが一気に夏休みムードになる。

さして興味もなかったが成績表をその辺に捨てる訳にもいかない。鞆にしまっていると、翔子が近づいてきた。

「あのさ、乙夜くん」

「…?」

いつもと違い大人しい翔子の態度に驚いて、乙夜は無警戒な顔のまま見上げた。すると彼女は緊張した面持ちで目を泳がせる。

「あ、あのさ…あの」

「?」

あまりの大人しさに、不思議に思って首を傾げる。翔子はうつむいて何か言っていた。

「…うわ、やっぱりダメだ…」

「? 何だよ」

「あ、うん、ええっと！ 私バイトあるし、途中まで一緒に行こうよ！」

「おい、押すな…」

何故か焦り出した翔子の勢いに押され、駐輪場まで連行される。すると、門の方が何やら騒がしいのに気付いた。人が多いと原付で出

にくいので迷惑だ。

そんな事を考えていたら、騒ぎの中心に思いがけない人物を見つけた。隣にいた翔子が小さく歓声をもらす。

「うわぁ…超美形…王子様みたい…」

乙夜の顔がひきつる。立ち止まった彼に、中心人物が気付いた。明らかに彼を待っていたのであろうが、かなり不機嫌な様子だ。

「お前…何でここに」

「…用もないのに来ると思うか…？」

昨日も会ったばかりだが、乙夜は彼の疲れきった態度を意外に思った。どうやら、何故こんな大騒ぎになっているのか分かっていないらしい。居心地悪そうな彼はなかなか面白い。

「禅？」

試しに名前を呼んでみると反応があった。困ったように乙夜を見たのだ。

この暑いのに汗一つかかない彼の人間らしい部分を初めて見た気がして、笑いをこらえて行き先を示す。

「何か分からねえけど、歩きながらでいいか」

「ああ」

禅が小さく頷き、翔子に視線を移す。美形っぷりに見とれていたらしい翔子が、はっとしてぱたぱたと腕を動かす。

「あ、ああのっ私の事は気にせず…！ バイバイ乙夜くんっ！ 花

火大会行こうね！」

「は？ まだ言ってるのか…おい、先行くなつて」

禅が歩き出してしまったので、翔子に対する返事ができないまま乙夜は後を追う羽目になる。

原付を押し、横に並んで海沿いを歩く。禅はまた無表情に戻っていたが、乙夜は構わず話しかけた。

「何だよ、用事つて。また仕事か？」

「…いや」

首を横に振って、禅はまた黙る。乙夜はその整った横顔を眺めて暫く待っていたのだが、結構な距離を移動していても続きは聞こえてこない。さすがにイラツときて催促しようとする、彼はようやく動きを見せた。

素早く周りに視線を送ってから、乙夜に向き直る。

「最近、変わった事はなかったか？」

「……………は？」

想定外の質問だった為、頭の回転が止まる。だが目の前の超絶美形は真面目に聞いているらしい。

「…例えば？」

「分からないが…変な男が周りをうろついているとか…」

お前以外にか、と危うく返しそうになって、乙夜は言葉を飲み込む。今はふざけている場合ではない。

「あとは…記憶が妙に曖昧な時がある、とか…」

「…ないと思うけど、何かあったのか？」

「……無いなら、良い……」

それきり禅がまた黙り込んだ。今度はちゃんと何か考えているようで、眉間に皺が出来ていた。突然やってきてそんな態度をとられると、乙夜も何だか落ち着かなくなる。

翔子もおかしかったが、彼も今日はどこか変だ。というより、こうして接触してきた時点で物凄く変だ。

「何なんだよ、急に来て訳の分からない事を……」

「…悪かったな」

聞こえない程度に言ったつもりが謝罪らしき台詞が聞こえてきて、乙夜は目を見開いた。隣の男はごく真剣な表情をしている。派手な外見に似合わず、どうやら乙夜が思う以上に彼は真面目な性格で結構な地獄耳らしい。

正直、翔子と会話するよりやりづらい。乙夜は長いため息をついた。

「謝られるくらいなら、そんな事聞きにきた理由が知りてえんだけど？」

「それは、……」

言いかけて、禅がはつと顔を上げた。鋭く目を細め、前方を見つめている。視線を辿って前を向くと、いつの間にか道の真ん中に幼い少年が立っていた。小さいのに派手な金髪で、どこか禅に似た顔立ちをしている。

「…え？」

少年と目が合う。途端に足元がぐらついた。原付につかまり何とか

耐える。

「何だ!？」

地面を確認してまた前を見ると、少年はまだじつとそこに立っていて、しかもその目は淡く光っていた。

「能力者…おい、禅？」

警戒の欠片もなく禅が少年に近づいていく。すぐ側に着くと、彼はくしゃりと少年の頭を撫でた。少年がかすかに表情を崩し、ぼつりと呟く。

「じかん、だよ」

「ああ。わかってる」

事情を知る者同士だけの会話をして、禅は乙夜を振り返った。

「たぶん何か企んでいる…気をつける」

「は？ 誰が何を…って…っ…!」

彼はそれだけ言うと、少年と共に闇に消えていく。こんな昼間から堂々と力を使っているのに驚き周りを見るが、見事なまでに誰もいない。

そのおかげで乙夜は一人、間抜け面で立ち尽くす事になった。

「何だこれ…嫌がらせ？」

その呟きに答えてくれる人物は、残念ながらどこにもいなかった。

死ぬほど暑い。

昨日までも確かに暑かったが、今日は半端じゃない。休みになった途端、更に夏真っ盛りの気温に跳ね上がったようだ。しかもこれは全国的なものらしく、ニュースでも散々話題に上っている。エアコンの類は嫌いなのだが、さすがに頼らざるを得ない。

窓を開けて寝た結果えらく早起きしてしまった為、乙夜は不機嫌なままエアコンのスイッチを入れる。そのままフローリングに寝転がって、ぼんやり天井を眺めた。

つけっぱなしのテレビからニュースが流れているが、乙夜の興味を引く内容は特に無い。頭の中は自然と先日の出来事を思い出していた。

闇の王の子、禅。そして彼にそっくりな少年。突然現れたと思ったら、また突然消えてしまった。

それはつまり、能力者としての彼らの力が乙夜を遥かに凌ぐという事だ。力の差がない能力者同士は余程上手く隠していない限り、互いに感知できる。それが出来ないのは、禅もあの少年も相当な力を持っているという何よりの証明になる。

「そりやそうか…あいつら瞬間移動したもんな…」

瞬間移動などと呼んでいいのか分からないが、事実彼らは力を使っ
て唐突に現れ、そして消えたのだ。何かを『燃やす』だけの乙夜に
は、決して出来ない芸当。

だが、そんな彼らが何を伝えようとしていたのか、乙夜は未だに理解出来ていない。加えて警戒しなければいけないような事態は、この数日何も起こっていないかった。

ため息をついていると、エアコンがようやく冷風を吐き出し始め、乙夜は安堵して目を瞑る。あまり寝ていないためすぐに睡魔が襲ってきた。

が、その途端床に置きっぱなしの携帯電話が振動で着信を知らせてきた。跳ね起きて画面を見る。表示された名前を見て、慌てて電話を掴んだ。

「はいつ…?」

耳にあてると、予想通りの苦情が飛び込んできた。

砂浜を覆い尽くすのではないかと思うほどの混雑。ようやく確保した場所は海が遠く感じた。

友人たちがはしゃぎ回る中、翔子は一人携帯電話とにらめっこを続けている。それに気付いた友人がぱつと電話を取り上げた。

「あつ！」

「まだ悩んでんの？ あんた」
「…うん」

頷いた途端呆れたような視線を受けて、だって、と小さく反論する。

「また断られるかなって思うと…電話出来ないよお」

「じゃあ家押し掛けちゃえば？」

「場所知らないもん…ああーどうしょ、私はどうしたらいいの!？」

派手に落ち込む翔子の周りに、他の友人たちも集まってきた。

「なになに？ もしかして橘くんの話？」

「翔子頑張ってるよねー」

「今度の花火大会に誘いたいんだけど、電話出来ないんだってさ」

「頑張んなよ翔子、あたしら応援してるから」

好き勝手に盛り上がる友人たち。軽く睨みつけて、翔子は取り上げられた電話を奪い返した。

終業式の日は、予想外の美形お兄さんが乙夜を連れて行ってしまい、結局きちんと誘えなかった。それから毎日また誘おうと決意してはくじけてしまう日々を送っていた。

そうこうしているうちに、花火大会まであと二日となってしまうている。

「もー、みんなして適当なんだから!」

「そんな事ないって〜! 私たち、翔子が本気だってちゃんと分か
ってるよ?」

「うー…」

乙夜は女のこめいた綺麗な外見に似合わず近寄りがたい雰囲気がある。それでも、見た目が良いから女子はやっぱり騒ぎ立てる。

しかし翔子は、最初から彼が好きで近付いた訳ではない。どちらかというと、クラスにいても少し浮いた存在の彼が放っておけない、というお節介からだ。

乙夜は極度な面倒くさがりなためにクラスに馴染もうとしないだけで、話せばきちんと聞いてくれるし、時々見せてくれる笑顔が優しかったりもする。

そして、ふとした瞬間に現れる、繊細で寂しそうな表情は、一度見ただけでも忘れられそうにない。

彼の抱えてる何かに、翔子はいつの間にか強く惹かれて、ますます放っておけなくなってしまうた。

だからこそ、毎日話しかけたり色々しているのだが、意識し出したら最近強く踏み込めなくなった。欲が出たのだ。面倒なやつだと思われている自覚は既にあるものだから、これで本格的に嫌われたら絶対立ち直れない。

はあ、とため息をついてうなだれる翔子に、友人たちは苦笑した。

「ねえ、家の場所知らないって言っても、この辺に住んでるんですよ？ 橘くん今日ここにきてたら凄くない？」

その発言で、まさかねと笑いつつも全員がきよるきよると辺りを見回す。しかしこれだけの人がいては、来ていたとしても分からないだろう。

と思っていた矢先。

「…あ。いた」

「嘘!？」

一人が指差したのは、海から一番遠い堤防の上。良く見えたなと思う距離だったが、そこに座るのは確かに乙夜だった。

暑さのせいか、いつも以上にやる気のなさそうな様子で座っている。

「行つてきなよ翔子」

「え!？ で、でも…」

何やかやと無理やり立ち上がらされ、堤防の方まで手を引かれて行く。

だんだん乙夜の姿が大きくなる。5、6メートルはある堤防の上に、彼は足を揺らして座っていた。良く見たら口には棒アイスがくわえられている。

案外子どもっぽいところを発見して嬉しくなる翔子だが、ここが海水浴場だという事を思い出して急停止した。

「ま、待つてよ、だって何で一人なの!？ おかしくない!？ 絶対誰か…」

「散歩かもしれないじゃん」

「あの乙夜くんが?」

面倒だという理由でクラスにも馴染まない彼が、この暑い中わざわざ外に出るだろうか。冷静に考えなくてもありえない。翔子はそつと堤防を見る。

乙夜はまだアイスにかじりついている。
するとそこへ、いやその頭へ、いきなりボールが投げつけられた。

「!？」

衝撃で乙夜の手からほとりとアイスが落ち、続いてボールも砂浜へと落ちた。偶然にも、そのまま転がって翔子たちの足元で止まる。

ポカンとして成り行きを見守っていると、乙夜の背後にボールの持ち主らしき人物が現れた。

派手な色合いの水着を着こなし、大きなサングラスをかけた女性だ。

彼女はだいぶご立腹な様子で、乙夜に対して文句らしき事を言っている。言われている方は、勢いに負けたのか素直に何度か頷いている。

「な、何あれ…」

「知ってる…？ 翔子…」

「……たぶん」

すぐには答えず、翔子は落ちてきたボールを拾う。ボールと言ってもビニールに空気を入れた軽いもので、ぶつけても痛くはないだろう。だが、彼にあんな事が出来るとすれば、彼女は…

「あ、すみません、そのボール私ので……あ!! あなたえっと…
翔子ちゃん!？」

やはり。サングラスを外した彼女を見上げ、翔子はペコリとお辞儀をした。顔を上げると、乙夜は気まずそうにしている。

それにあはは、と引きつり笑いを返していると、彼女は階段に回っ

て砂浜までやってきた。

「こんにちは里佳さん！」

「この間ぶりー！ そちらはお友達？ うん、みんな水着似合っていて可愛いじゃない 若いって良いわねー！」

「あ、はあ…？」

訳が分かっていない友人たちはポカンとしてそう返す。乙夜と同じ整った顔立ちが水着を完璧に着こなしている状態では、誉められてもあまり納得いかないかもしれない。

誰、誰？ とつついてくる友人に、翔子は言った。

「あのね、乙夜くんのお姉さんの、里佳さん」

「ええ〜!？」

「ふふつ、こんにちは」

その反応が面白いのか、里佳は上機嫌である。友人たちが慌てて自己紹介しているうちに、乙夜も降りてきて合流した。泳ぐ気がないのか、水着の姉と違いしっかり服を着ている。目があうと、乙夜は「よう」と声をかけてきた。

「あ、う、うん…」

意味もなく焦っていたいた返答は出来なかった。それきり乙夜が姉の方に向いてしまったため、翔子は密かに落ち込む。

「あ、そうだ！」

里佳が一段と大きな声で言い、翔子の手をとる。彼女の大きくて綺

麗な目に見つめられると、同性ながらどきまぎする。

「ねえ、翔子ちゃん、せっかくだから私も仲間に入れてくれない！
？ 荷物番は乙夜がやるから！」

「えっ！？ でも……」

突然の提案に驚き、思わず乙夜を見ると、彼は何もかも諦めきった顔をして遠くを見ていた。

「……………」

「ね、良いでしょう!?!」

キラキラと効果音が聞こえてきそうなる里佳の視線。きつと乙夜もこれで押し切られたのだろう。

そして翔子には、この誘いを断る理由も勇気も持ち合わせていないのだった。

1 - 7 . 『約束』

これは夢だろうか。

何度目かはもう忘れたが、翔子は今の状態を確認してみる事にした。翔子は今、海沿いの国道を歩いている。

乙夜と二人、だ。

緊張しながら視線を動かす。渋滞気味の道路を背景にして、乙夜は歩調を合わせて横を歩いている。

日中の焼けつくような暑さも、太陽が赤く色付いた今は感じない。同じ色に染まった彼の横顔は、いつもより穏やかに見えた。

「…何だよ？」

「え！？ 何でもない！」

じっと見ていたのに気づいていたらしく、乙夜が不思議そうに翔子を見下ろしてきた。慌てて首を振り、翔子は前を向いた。

里佳の誘いを受けて、今日はおおいに遊んだ。友人も里佳とすっかり打ち解け、かなり盛り上がったが、その間乙夜は何をしていたかというと、姉の言いつけ通り荷物番。炎天下のパラソルの下、一人黙々とである。

と言ってもほとんど眠っていて、休憩ついでに話せないかと何度かチャレンジしたら、近付いたのが翔子だと確かめるや目を閉じる、の繰り返し。

帰りは友人と一緒にバスになる為、ここまで歩いて数分だという乙夜とは海で別れる事になる。

奇跡的に会えたのに、花火大会に誘うどころか一言も話せず終わるのかとがっかりしていたら、なんと友人たちはバスに乗り込もうとした翔子を追い出して帰ってしまったのだ。にやにやした笑顔つきで。

更に驚いたのが、呆れた顔の乙夜がやって来て「駅まで送る」と言い出した事。確かに、こうなったら三十分後のバスを待つより電車の方が早く帰れる。

「あの…」

「うん？」

呼びかけたらすぐに返事が来て、翔子は言葉につまった。

「本当に良かったの？ お姉さん一人にして」

てつきり一緒に来てくれるのかと思ったら、里佳は先に帰ると言い出した。

そして、「乙夜は多少強引にしたら絶対逆らわないわよ！」という素敵なアドバイスを残してあっさり帰ってしまった。いつの間にか友人たちと結託していたらしい。

とは言え、乙夜が強引にされても逆らわないのは里佳が彼の姉で、とびきりの美人だからではないかと思う。自分には当てはまらない。せっかくのアドバイスだったが、翔子は虚しい気分ですら結論付ける。

「別に…家近いし、気にしなくて良い」
「そ、そっか…」

会話が途切れた。横顔を見る事も出来なくて、翔子はひたすらうつむいて歩く。

「…今日は、助かった」
「えっ？」

今度は乙夜から意外な事を言われ、首を傾げる。助かったのはむしろこちらの方なのだが。

「…姉貴の相手してくれたろ。助かった」
「あ、や、でも…せつかくお姉さんと来たのに」

すっかり邪魔してしまい申し訳なくなっていたら、乙夜は眉間に見事な皺を作っていた。

「あのな、この歳で姉貴と二人で海とかないだろ…」
「そっかなあ？」

あんなに美人で優しい姉なら、翔子は大歓迎である。

「とにかく、助かったから…」
「あ、もしかしてそれで送ってくれるって…？」
「まあな…あと買い物あるし」

なんだ結局ついでか、と本人には出来ないので沈み行く夕日に恨めしい視線を送ってみる。

だが、この時間が唯一のチャンスである事に変わりない。すぐに向き直った。

「ね、ねえ、乙夜くん花火って…嫌い…？」

遠回し作戦で尋ねると、彼は少し考える素振りを見せた。

「どうかな…あんまり、花火見たりやつたりした経験がない。あと、人混みが嫌いだ」

「うっ…そう…だよな」

そうきっぱり言われては、花火大会の話題まで持つて行けない。彼もそれが分かった上での答えだったのだろう。ついに撃沈したかと肩を落としていたら、何故かクスツと、含み笑いが聞こえてきた。

顔を上げると、目の前に悪戯っぽく目を光らせる彼の笑顔があつて、下がりかけていた体温が急上昇する。

「なっ…何!？」

「そんなに行きたいのか、花火？」

「うう…ハイ…」

思えば幾度となく話題にしているのだ。花火というワードだけでバシるに決まっている。子どもっぽくて恥ずかしい、と今さら気づいて翔子はまたうつつむいた。

「そんなに元気無くす事じゃねえだろ」

落ち込む彼女を見て、乙夜が笑う。

その優しい表情にまた、どうしようもなく魅せられて泣きたくなっ

たりしているのだが、彼はそこまで気づいていない。前方を顎で示して翔子に促した。

「ほら、駅……」

「あ……本当だ」

高校へ通うのにも使っている路線だから、駅の造りは同じだ。見覚えのあるような外観を見て、翔子も頷いた。

「ありがとう、乙夜くん」

「いや……気をつけるよ、もう暗いから」

確かに、さっきまで明るかった空はもう星が輝き始めている。だが、乙夜からそんな事を言われると思っていなかった翔子は、一瞬動きを止めた。

「どうした？」

「う……うん、平気！」

幻聴じゃないよね、と失礼な事を考えながら、自然と顔がにやける。彼のこういう面を知っているのは、きっと本当に限られた一部の人間だけだろう。

友人たちにも聞かせてやりたいが、それはそれで勿体ない気がした。乙夜の事は分かって欲しいが、ライバルは増やしたくない。

「……………あのさ」

「え？」

行こうとしたら話しかけられ、翔子は目をしばたたく。日が沈み、ライトからも外れた彼の表情は良く見えない。だが、まっすぐ翔子

を見ているのが分かった。

「まだ…分からないけど…用事がなかったら…少しくらい行っても良いけど」

「え…なっ…ええ!？」

今度こそ幻聴ではないかと思うような事を言われ、翔子は大げさなくらい驚いてしまった。

途端、乙夜が不満そうな目つきになる。

「何だよ」

「だって…良いの!？ 花火大会一緒に行ってくれるの!？」

「ああ、だから、急な予定が」

「ありがとう乙夜くん！ じゃあ後で場所とかメールして良い!？」

「お、おう…」

「絶対するからね！ 後で知らないとか無しね!？」

「…わかつ、た…」

「じゃあ、後でねー!」

「……」

念を押そうとした乙夜を完全無視で押し切って、翔子は満面の笑みで改札を抜けた。

まさに里佳の言う通りの事を実践したのだが、嬉しいあまり自覚なしのまま、入ってきた電車に飛び乗る。

「やった…!」

小さくガッツポーズを決めて、電車の窓に張り付く。

にやけっぱなしなのが分かる。それを両手で隠し、夢じゃないよね、と心の中で言っ、窓に映る自分に微笑みかけた。

「凄いテンションだったな…」

一方の乙夜は彼女の乗った電車を見送った後、つい思い出し笑いしてしまった。しかしすれ違う人の視線を感じて咳払いする。

里佳にまでしつこく言われてつい頷いてしまったが、仕事が入ればキャンセルするつもりでいる。

あの様子だとまた落ち込むだろうが、仕事の前に入混みに入るのは気が滅入りそうだ。

第一、何故こんな自分に関わろうとするのか、乙夜には良く分からない。お節介を焼くのが好きなのだろうが、その割にしつこくなかったり、かと思うと先ほどのように乙夜無視ではしゃいだり。

それでも、何でも強引な姉よりかはまだ大人しいものだから、翔子相手の方が楽かもしれない。今日一日でそれを少し実感した。

「…ただいま」

家に戻ると、予想していた返事がなくて拍子抜けする。靴はあるのを確認して、中に進む。部屋は冷えきっていた。

「姉貴…」

玄関の鍵も開けっぱなしだと言うのに、彼女は乙夜のベッドを占領して眠っていた。

「まあ、あんだだけ全力で遊べば…」

疲れ切っているのか、軽く揺すっても起きない。シャワーを浴びてきてすぐ寝転んだらしく、髪はまだしっとり濡れていた。掻き揚げると何やら甘い香りがする。

「ったく…」

いくら夏でも、こんなに冷えた部屋で髪も乾かさず寝たら風邪を引く。近くに落ちていたタオルを拾い上げて拭いてやる。

彼女がいるにしては珍しく、静かな時間が流れる。

一人の静けさとは違うその感覚に、乙夜は既視感を覚えた。

ぼんやりとした記憶だが、昔もこんな事があったのだ。

里佳は昔から何にでも全力で体力の制御ができず、結局最後は疲れ、無理やり巻き込まれた乙夜が後始末をしていた。

「んー…痛い…」

「なら自分で拭けよな…良い大人なんだから…」

「やー…」

寝言だったのか、里佳はそれだけ言うともた寝息をたて始める。ため息をついて、乙夜は止まっていた手を動かした。

彼女の方が歳上のくせに、こうしているとこちらが兄のような気分だ。

「…いつ…や…」

「ん？」

「やく、そく…」

「花火か？ たぶん行くとは言ったけど…」
「すー…」

翔子との事を言っているのかと思って答えたら、返ってきたのはまた寝息だった。寝言と二回も会話するとさすがに少し恥ずかしくなつて、何なんだよ、と軽く悪態をついて視線を反らす。もう絶対反応しない。次は何としても叩き起こす。

そう胸に誓つて、作業を止めにした。乱暴ではあるがもう十分だ。それに、夕飯用に買った食材を玄関に置きっぱなしだった。それを思い出し急いで冷蔵庫にしまい、パタンと閉じる。

「あ…」

ここでようやく見覚えのないものに気付いた。今朝まで何も無かつたはずの冷蔵庫に、マグネットで小さなカレンダーが貼つてあるのだ。

しかも、手帳のカレンダーを破つたようだ。毎日何かしら、派手な色のペンで予定が書き込まれている。里佳以外考えられないし、華やかな彼女らしい色使いだ。

だというのに、明後日、花火大会のある24日は、何の予定も書きこまれていなかった。書いていないだけなのか、それとも本当に未定なのか。いつの間にか、乙夜は吸い寄せられるようにその数字の羅列を見つめていた。

「…この、日…」

7月24日。その並びだけが異常に頭に残る。

何か、忘れていないか。

そんな思いが唐突に湧き起こる。めまいがした。

『記憶が曖昧だとか…』

吐き気にまで襲われる彼に、禅の言った言葉が今更響いてくる。

何だ、一体、何だ。

違和感の正体を探し、乙夜はひたすら空白を睨みつける。

「…乙夜」

「！」

振り返ると、里佳が起きていた。びくつと体を震わせた彼に、彼女は儚げな笑みを見せる。

「約束、ね？」

そう言った里佳の姿が、かつての彼女と重なる。

その瞬間、乙夜は違和感の正体に気付いた。

「……あ……！」

目を睨り立ち上がる乙夜。

対する里佳は、ただ、笑みを深くするだけ。

「っ！」

乙夜の視界が暗転した。体に走った衝撃は、床に倒れたせいだろう。

「姉……里佳！」

大声で叫んだつもりだったが、実際はかすれた声しか出なかった。

くすくす。

遙か頭上から、彼女の笑う声がする。しかし乙夜の体は全く動かず、まるで泥沼に押し込められていくようだった。

「やっと、思い出した？ 私は、忘れた事…無かったけど…？」

それだけ告げて、彼女の足音が遠ざかる。

わずかに回復した視覚が捉えたのは、乙夜の記憶の中と同じ、かつてと寸分違わぬ姿のままの、里佳の後ろ姿だった。

「死ぬ時は海のそばがいいな」

「え……」

明るくて、優しく、綺麗な笑顔ばかり浮かべている、そんな姉だから、ふと聞こえてきたその独白は、乙夜の耳に強く残った。

死。

そんなものを考えながら彼女が生きているとは、思ってもみなかった。

「聞こえちゃった？」

「……うん」

「そう」

彼女はそう頷いたきり、また前方に目を向けて口を閉ざす。

死。

死とは、何だろう。

幼い彼はまだ身近にそれを感じた事がなく、仮にあつたとしても何と表現できるだけの言葉を持っていない。

けれど、ほんの一瞬、乙夜に向けた彼女の表情があまりに切なくて、胸が痛くなったのは、確か。

そつと、胸の辺りをおさえる。

いつかこの痛みを説明する事が出来れば、きっと問いかけの答えも分かるに違いない。

彼なりにそう結論付け、姉に気付かれないよう小さく息を吐く。

海が見たいと半日かけてやって来て、彼女　　里佳はこの浜辺でも
う何時間も座っている。

いつものように無理やり連れ出された乙夜は、はじめこそ海に浸かったり浜辺を走ったり落書きしたりしていたのだが、一人遊びの限界を感じて結局姉の横で落ち着いた。

あまり人気のない浜辺らしく、昼間はまばらにいた人々も、日が暮れ始めると一様に引き揚げていく。時折、散歩中の犬が走り抜けたり鳥の鳴き声が響いたりはするが、閑散とし始めていた。

そうになると、今まで気にしていなかった波の音が徐々に大きく聞こえて、それがなんとなく、暗い色に染まるあの海へと誘われているようで恐ろしい。

早いところ離れたいが、頼みの綱は重い沈黙の中。乙夜は困り果てた。

そもそも、家を出た時から里佳の様子はいつもと違っていたのだ。今更気づいて少し後悔する。

だが、何と切り出せばこの沈黙が破れるのか乙夜にはさっぱりわからない。出来るとすれば、ただじつと姉の顔を眺めるくらい。

相変わらず里佳は海を見つめている。そこには何の感情もなく、まるで鏡を見ているような気分になった。

年の離れた姉弟ながら、昔から良く似た顔立ちだと言われ続けてきた。だが、決定的な違いは成長の差ではなく表情の豊かさにあるという事を、乙夜は一番理解している。

感情の起伏が激しい姉と、乏しい弟。集団の中にあつて、常に輝くのが彼女、一人ポツンと外れているのが自分。最終的にはそんな弟を姉が無理やり自分の輪にねじ込むのだ。

それがずっと当たり前で。二人が同じ空間にいてこんなに会話がなく、何より彼女が無表情でいるなど、非常事態に他ならない。

今こうして冷たくすら見えてしまう里佳の整った横顔を見続けるのは、乙夜の不安を煽るのに十分だった。

「…帰ろっか」

耐え切れなくなった乙夜が本格的に泣き出しそうになってきた頃、ようやく里佳が笑顔でそう提案した。

乙夜は安堵に包まれながら何度も頷き、服に付着する砂を払う。それが終わって横に目をやると、里佳は空を見ていた。そして、不意に沖合の小島を指差す。

「いっちゃん、知ってる？ あの小島から花火が上がるのよ」

「えっ、いつ!？」

「んー、あさつてだったかしら？ お祭りよね、花火。今日はその下見だったのよ」

「あさつても来るの？ 本当に？」

「いっちゃんがイイコにしてたらね」

「する!」

「約束よ？」

「うん!」

無邪気に喜ぶ乙夜に微笑み、里佳は浜辺を歩き出す。

その後ろを跳ねるように付いて行く乙夜は、たった今姉と交した約束で頭がいつぱいで、ついさっきまでのあの沈黙の事など、すっかり忘れていたのだった

真っ先に目に飛び込んできたのは、良く見慣れた天井の色。

何度かまばたきを繰り返して、乙夜は起き上がる。頭がじんわり熱く、まるで重しを乗せられているように動かさづらい。

熱でも出たかと自身の手を当ててみるが、その手も熱を持っていて余計暑くなった。

そう、暑い。

何とかベッドから起き上がり、エアコンのリモコンを探す。表示を見ると、30度近い室温になっていた。うわ、と眩きスイッチを入れて窓を閉める。

迷わず冷蔵庫をあさり、スポーツドリンクを見つけて飲み干した。冷蔵庫に顔をつっ込むと最高に気持ち良い。ずっとこの中にいたい気分である。

「ん…？」

が、水分と冷風が身体に染み渡るのを全力で感じ終わると、今度は強烈な違和感に襲われた。

「俺…いつ寝たっけ…？」

時計を見る限り、記憶にある時から既に12時間は経過している。疲れていたのは覚えているが、ベッドに入った記憶はない。しかもこの暑い中、熱中症寸前まで寝ているなど奇跡である。

乙夜は辺りを見回した。

何か忘れている。

何か足りないものが、ここにある。

「…くそっ…」

分からない苛立ちが全身に広がる。手にしているペットボトルはあつという間に潰れた。だが、潰したからといって何も思い出せそうにない。

熱くなる一方の頭を押さえた、その時、

ピンポーン！

突如、間の抜けた音が部屋中に響いた。

一時的に全ての感情が遮断され、乙夜はいつの間にか呼吸を止めていたのに気づき、深呼吸する。

何度か繰り返し返して気持ちを落ち着かせ、玄関の向こうへ意識を移した。

人の気配はあるが、またインターホンを押すつもりはないようだ。なぜなら、直接自身の手でドアを叩き始めたので。

「乙夜くん、いる!?!」

乾翔子。

声を聞くなりその名が浮かぶ。同時に、何故ここにと疑問に思った。自宅の場所を知らせた事はないはずだが。

今はあまり顔を合わせたくないのだが、切迫した声で呼ばれ続けるのを無視する事はできない。

「おい、声が大きい!?!」

「あつ乙夜くん！ 良かったあ！ 私暑くて死にそうで」
「そんな理由で人の家に押し掛けてきたのか」

半眼で睨むが、確かに彼女の後ろからは、生温いを軽く通り越したサウナ級の熱風を感じる。結局、入るよう促して、ドアを閉めた。エアコンが動き始めたばかりの室内はまだ完全に冷え切っておらず、それだけに肌に優しく心地良い。二人して安堵の息を吐いた。

「はああ…天国…」

「何なんだ、いきなり!?!」

心底幸せそうな翔子の顔を見て、乙夜は脱力した。ぐったり床に崩れるのをエアコンの真下で目撃した翔子はすぐさまにじり寄ってきて、心配そうに乙夜を覗き込んだ。

「具合が悪い!? あ…それともやつぱり迷惑…?」

「…いや…」

確かにいきなり押し掛けられて驚いているが、この脱力感は決して嫌なものではない。むしろ

「ナンデモ、ナイ…」

「へ?」

安心した。

その事実には愕然として、乙夜は口元を引きつらせた。翔子は彼のそんな心情には気づかず、きょとんと座り込んでいる。が、自覚してしまうとその間抜け面も見ていられなくて結局乙夜は頭を抱えた。おずおずと、心配そうな翔子の声が降ってくる。

「ねえ、本当に大丈夫? あの…様子が変わって聞いて来たんだけど

…」

「…誰に?」

そうだった。一体誰からこの場所を聞いたのだろうか。ちら、と見上げて尋ねると、彼女は何故か少し顔を赤くしていた。激しく目が泳いでいる。

「うんと…この前、学校に来てた…」

「禅か! あのヤロ…どこで会った!?!」

「えっ、コンビ二の前で声かけられて、それで…昨日倒れてたから様子見て欲しいって。乙夜くん、倒れたの？ 病院行った？」
「……………」

追いかけて文句の一つも言ってやろうと思ったのだが、おそらく近くにはいないだろう。だいたい、あの男はいつも一方的に現れ消えるのだ。ここは諦めて次の接触を待つしかない。

苛々しながらそこまで考えて、待てよ、と乙夜は眉を寄せた。そもそも、何を文句とすれば良いのだろうか。

翔子を勝手に連れてきた事だろうか。それとも、別に何か言いたい事があっただろうか。あった気がする。

「乙夜くん？」

難しい顔でまた座る乙夜を、翔子が不審そうに見つめている。

「やっぱり調子悪いんでしょ…暑いけどご飯ちゃんと食べて…ああ

っ！

「？」

きよるきよると部屋を見回した途端、彼女は一直線にある方向へ走る。気だるいのでとりあえず見送ると、彼女は凄い勢いで冷蔵庫のドアを閉めていた。

「開けっぱなしだったよ乙夜くん！」

「ああ…」

色々考え事をしているうちにすっかり忘れていた。顔を返すが、その反応は翔子のお気に召さなかったらしい。口を尖らせて冷蔵庫をバシンと叩く。

「もう、気をつけないと中の物ダメになっちゃうよ？ そうだ、何か栄養のあるもの作ろうか？」

「…出来るのか？」

「出来るよ！ カレーくらいなら…」

「何時間かかるんだ。第一、カレーの材料なんてないぞ」
「うっ」

冷静に突っ込んでやれば、予想通りに翔子が黙りこむ。それを笑って眺めながら、乙夜は昨日の記憶を辿ってみる。そういえば、買い物をしたような気がする。

「なあ、何が入ってる？」

「えっ、とお…」

言われるまま、彼女はまた冷蔵庫を開けて中を確認し始める。

「あ、お肉…あれ？ 結局カレー作れそうじゃない…？」

乙夜も一緒に覗き込むと、確かにそんな揃い方だった。しかも、量も一人分ではない。

「もしかして、里佳さんと作る予定だったの？」

「…！」

何気なく言われたその一言で、乙夜はビクッと飛び退いた。翔子もそれに驚いて振り返る。

「え？ え！？」

里佳。

その単語が鍵だった。乙夜の中に、様々な記憶が波のように押し寄せてくる。

「乙夜くん！」

翔子の声はもはや悲鳴に近い。頭に響くそれに思わず顔をしかめるが、彼女はお構いなしに叫び続ける。

「しっかりして！ あ、そ、そうだ、救急車…っ」

あたふたして携帯電話を手にする翔子。その手をすかさず押さえ、乙夜は言った。

「いいから…」

「でもっ」

「黙って」

顔を上げ、しっかりと彼女を見据える。

視界の隅、冷蔵庫に貼り付けられた、派手な色のカレンダーにも一瞬目をやる。

そうか、と頭の中で理解して、乙夜は皮肉げに口元を歪めた。

本当は、ずっと感じていた違和感。気付いていないかのように過ごしていたけれど、それは最初から、分かっていたのだ。

「…里佳、は…」

里佳のその存在こそが、答え。

翔子にそれを告げるのは簡単だが、一体誰が信じるだろうと結局口を閉ざす。

「な、なに…?」

戸惑う彼女に、何でもないと首を振ってゆっくり立ち上がった。

「俺…ちよつと行くところあるから…涼んだら帰れよ。鍵は…かけなくっていい」

「え、じゃあ私も」

「来るな。休んでろ」

「違…休むのは乙夜くんの方でしょっ…っ、待ってよ!」

彼女の言葉はこの際無視して、勢い良くドアを開ける。すぐに熱風に迎えられると思いきや、そこにはなんと、暑さなどまるで感じないような、涼しい顔をした人物が立っていた。

「お前…!」

「行くのか」

乙夜の文句を遮り、またいきなり現れた禅が尋ねてきた。いや、それとも翔子を連れてきてからずつといたのか。

ともかく彼の静かな目に居抜かれ、昂っていた気持ちが一気に冷める。

「……………ああ」

乙夜が頷くと、禅は何も言わずに手を伸ばす。そのままごく自然に乙夜の額に張り付いた。一瞬の事で避ける間もない。

「おい…何、今の…」

「さっさと行け」

今ので完全に乙夜のペースを乱したわりに、禅は呆けるなど言わんばかりに鋭い視線を寄越す。

そして次の瞬間彼は既に、乙夜の後ろで口を開けっぱなしにしている翔子に向いていた。

足止めしてくれるという事だろうか。

良い方に解釈して、乙夜は彼の横をすり抜けた。

「頼む」

「ああ」

禅の頷きに、なんとなく背中を押されたような気がする。乙夜はそつと笑みを浮かべた。

目的地まで、走って行ってもそう時間はかからない。容赦なく照り付ける太陽をほんの僅か見上げてから、彼は全力で走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8199i/>

UNDER COVER OF DARKNESS－《闇》

2011年10月5日01時47分発行